

アオザイの女の子

11月22日、ベトナムのダナンからホーチミンへの機上の機内誌・HERITAGEを見てると、ルーレットの写真と「BINGO CLUB」という広告が載っていた。隣に座っている友人に「おい、ベトナムにもお洒落な雰囲気のカジノがありそうだから、覗いて見よう」「その後で勝負の結果などがやがやいいながら食事をしよう」「試しだから1万円だけだぞ」と期待を胸を膨らませ、静寂な室内での束の間の緊張感、ディーラーとのやりとり等ドイツのバーデン・バーデン・カジノの思い出が蘇ってきた。

友人に「ジェームス・ボンドになったような気持ちでやりましょう」と言って情緒豊かなレックスホテルのカジノの門をくぐった。一瞬全員が目になり口が重くなった。カジノと言うよりはゲームセンターのような無味乾燥な空間でルーレットはデジタルで表示され、憧れのディーラーはいなかった。コインは数字として画面に表示されるため、チップに手で触れる楽しみもない空虚な世界であった。ベトナム女性の伝統的な民族服・アオザイを着た妙齢な女性が笑顔で説明してくれたが、勝負はだらけ、あっという間に10ドルはなくなってしまった。ボンドの代役が出来なかった不満を残し、もう一軒のオムニホテルへと向かった。



ホンモノのカジノは・・・

ここも渋谷のゲーセンそのもので騒々しく煙草の煙でむせ返っていた。洒落っ気もなく早々に引き上げた。せっかく上手に散財するつもりで出掛けたのに、その日一日のツキが落ちてしまったようであった。しかし100ドルの予想が10ドルで済んだため食事の話題はしっかりとカジノ中心となり大いに盛り上がった。参考のために、いずれもチップは25セントであった。「カジノで街興し」、「我が町にカジノ誘致を」という声が聞かれ始めているが、ベトナムで換金出来るゲームセンターのようなカジノを初体験すると「カジノで街興し」と言われても全然面白くも楽しくも無く、なぜただのゲームセンターやパチスロのショップが街興しに為るのだろうと不思議がるだろう。

今までバーデン・バーデンのカジノ体験から、カジノが街づくりの基礎となる要素の一つと思っていた。しかしベトナムのカジノは、ただの換金出来るゲームセンターのようなお手軽なシステムで、誠に勿体ない活用の見本みたいな安晋請のカジノ空間であった。シンガポールのラッフルズホテル、バンコクのオリエンタルホテル、サイゴンのコンチネンタルホテル等に漂うコロニアルの甘酸っぱい建物のイメージを生かした人が介在するカジノがあれば、タイを引き締め飾り付けて、さらに勝負の後にワインと独特の料理を食べながら蘊蓄を傾ける楽しみは、何事にも替え難い思い出となり、次の訪問を期待に満ちたものに変えるであろうに、今回のカジノ体験は、返す返すも残念であったが語り草にはなりそうである。

カジノは、場末のギャンブル場ではなく、洒落た大人の楽しむ社交場としての場でありたいものである。そのような場は、ボイ捨てをした花を取ったり盗みを働く人が減り隣人に優しい街へと変化するものである。

日本のカジノは、哲学を持った街造りの要素として生かしたいものである。

ベトナム・カジノノ失望記

文十徳島カジノ研究会・中西昭憲

